

# アカデミック・カフェ・キャラバン (ACC) のアクション・リサーチ

大学行政管理学会

2016年度 第20回 定期総会・研究集会

研究・事例研究発表「Ⅱ-10 研究 共同」

日時：2016年9月11日（日）13時15分～13時45分

場所：慶應義塾大学（三田キャンパス）

上畠洋佑（金沢大学）

荒木俊博（淑徳大学）

喜久里要（早稲田大学）

# 研究の背景①

中央教育審議会大学分科会

「大学のガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」

→ 「SDの義務化」に関わる制度改正の必要性を指摘

「大学設置基準等の一部を改正する省令の公布について（平成28年3月31日付文部科学省高等教育局長通知）」

→ 「（略）全ての大学等に、その職員が大学等の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させるための研修（スタッフ・ディベロップメント。以下「SD」という。）の機会を設けることなどを求める」

平成29年4月1日よりSDが義務化される。

## 研究の背景②

文部科学省は省令によりSDを義務化する。

対象は、事務職に限定せず、教員や学長等を含む大学執行部や技術職員等も含むものとして整理している。

具体的な対象や内容、形態等は各大学の実態に合わせて実施することを各大学の自主性に期待し委任する方針をとっている。

# 先行研究

孫福（2003）は、日本におけるSDはスタッフという言葉の語感と教員開発としてのFDとの対比から、職員開発という意味を強調して受け止められ定着したと指摘している。

岩崎（2014）は、国公立大学の人事担当者を対象にSDに関わるアンケート調査と、SDを実践する大学を対象とした訪問調査を通して「総体的にSDは未熟な段階であると推察する」と述べている。

「研究の背景」と「先行研究」から文部科学省の意図・期待と現状に乖離があり、各大学がSDに関わる取り組みを行う過程で様々な混乱や支障が生じるのではないかと、という本研究者3名の問いが生まれた。

# 研究の目的

本研究者3名は、SDが義務化される平成29年度を各大学が迎えるにあたり、SD義務化について課題意識を抱く有志の参加者がワークショップ形式でSDについてディスカッションを行うイベントである「アカデミック・カフェ・キャラバン（以下「ACC」）」を計2回実施した。

ACCを実践研究（アクションリサーチ）の対象及びその場とし以下の2点を明らかにすることを本研究の目的とする。

1. ACC参加者のなまの声を通したSDの現状と課題
2. ACC実施の効果や影響

# アクションリサーチとは

社会心理学者のクルト・レヴィンが創案した用語で、社会科学の実験的アプローチと、社会問題に取り組む社会的行動計画を表わす（シュワント, 2009）。

フィールド（現場）において重要な問題に取り組みながら解決を求めるという研究のあり方（武田ほか, 2016）。

# なぜアクションリサーチか？

日本では一般に、SDはFDに対比する概念として捉えられている（孫福，2003）。

FDの現状と課題について研究を行った山田（2010）は、「実践を対象化するような研究であれば、研究者自身が関与することがむしろ積極的な意味を持つ場合も少なくなく、その意味で『アクション・リサーチ』や『ケース・スタディ』も精緻化していかねばならない」と述べている。

佐藤（2015）は、FD研究に適した研究手法としてアクション・リサーチを提起し、FDを担う者は自らの行為こそ研究対象にすべきであると主張している。



アクションリサーチの対象及び実践の場であるACCは、参加者が「当事者」兼「研究者」としてSDに係る課題解決（検討・分析）を経験する場として設定した。

# ACCについて①

- 第1回ACC（左下図）  
2016年4月23日（土） 都内A大学  
午後1時～5時（4時間） 参加者数25名
- 第2回ACC（右下図）  
2016年6月18日（土） 関西地区B大学  
午後1時～5時（4時間） 参加者は23名





# ACCについて②

## ■ 第1回ACCプログラム

- 13:00-13:10 趣旨説明
- 13:10-13:30 イントロダクション
- 13:30-13:45 質疑応答・休憩
- 13:45-13:50 ワークショップ概要説明
- 13:50-14:00 個人ワーク  
(コンセプトマップ)
- 14:00-14:15 シンク・ペア・シェア
- 14:15-15:45 グループワーク
- 15:45-16:00 休憩 (名刺・情報交換等)
- 16:00-16:30 グループ発表
- 16:30-17:00 総括・アンケート

## ■ 第2回ACCプログラム

- 13:00-13:10 趣旨説明
- 13:10-13:30 イントロダクション
- 13:30-13:45 質疑応答・休憩
- 13:45-14:00 ワークショップ概要説明
- 14:00-14:15 個人ワーク (KWL)
- 14:15-16:00 ワールド・カフェ
  - ① ラウンド1 グループワーク 30分
  - ② ラウンド2 トラベリング 30分
  - ③ ラウンド3 グループワーク 45分
- 16:00-16:30 ハーベスト  
(共有とふりかえり)
- 16:30-17:00 総括・アンケート

# 研究方法

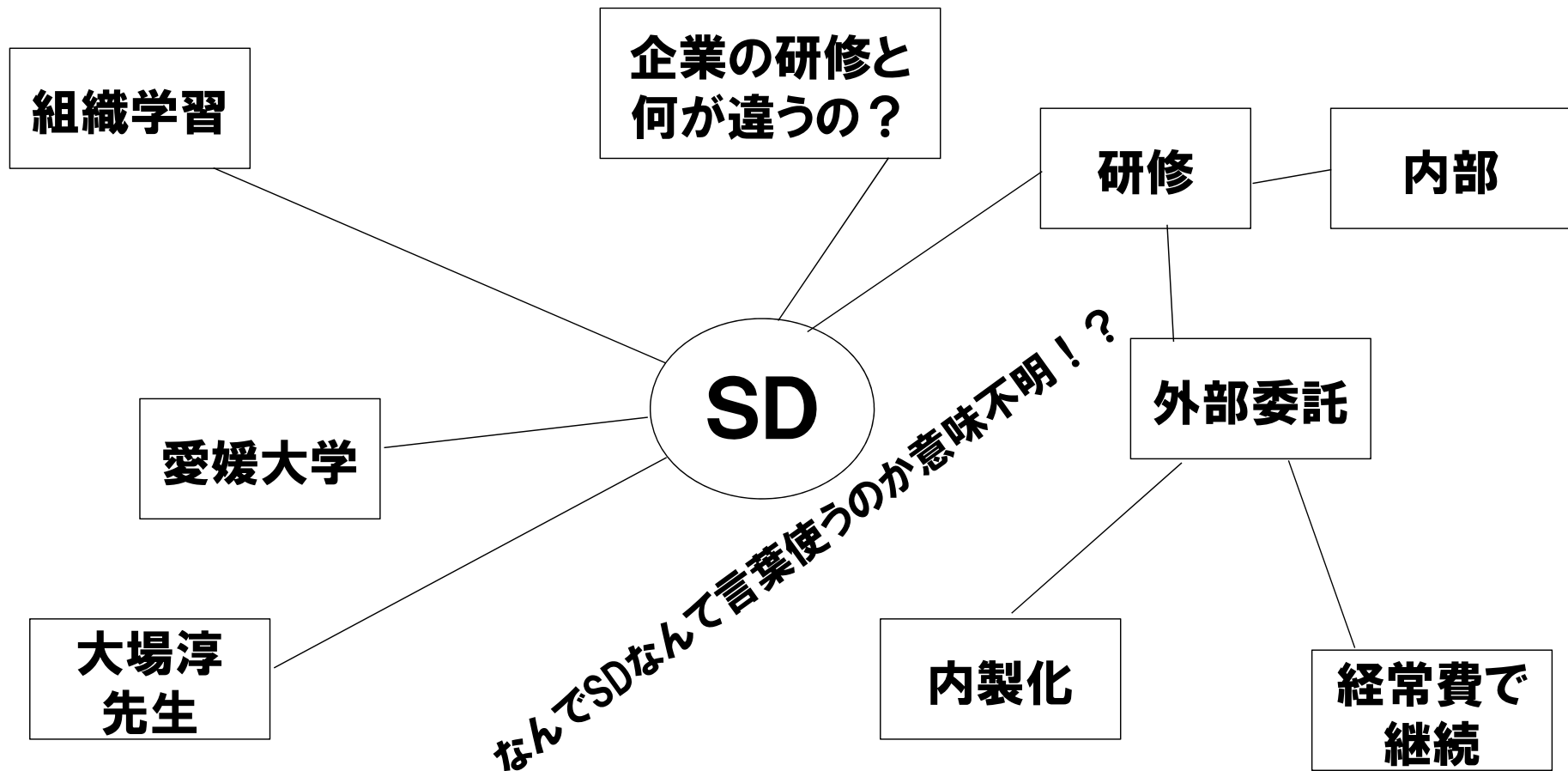
1. ACC参加者のなまの声を通したSDの現状と課題
  - ①第1回ACCのコンセプトマップのテキストマイニング
  - ②第1回ACCのグループワーク結果のKJ法分析
  - ③第2回ACCのKWL「KNOW：事前知識」のKJ法分析
  - ④第2回ACCのグループワーク結果のまとめ
  
2. ACC実施の効果や影響

FD研究におけるアクション・リサーチ・サイクル「アクションの評価」（佐藤, 2015:105）の援用。カークパトリックの4段階評価を用いて分析する。

  - ⑤第1回ACCと第2回ACCのアンケート結果の比較分析
  - ⑥第1回ACCと第2回実施後の効果・影響分析

# 結果①（コンセプトマップ）

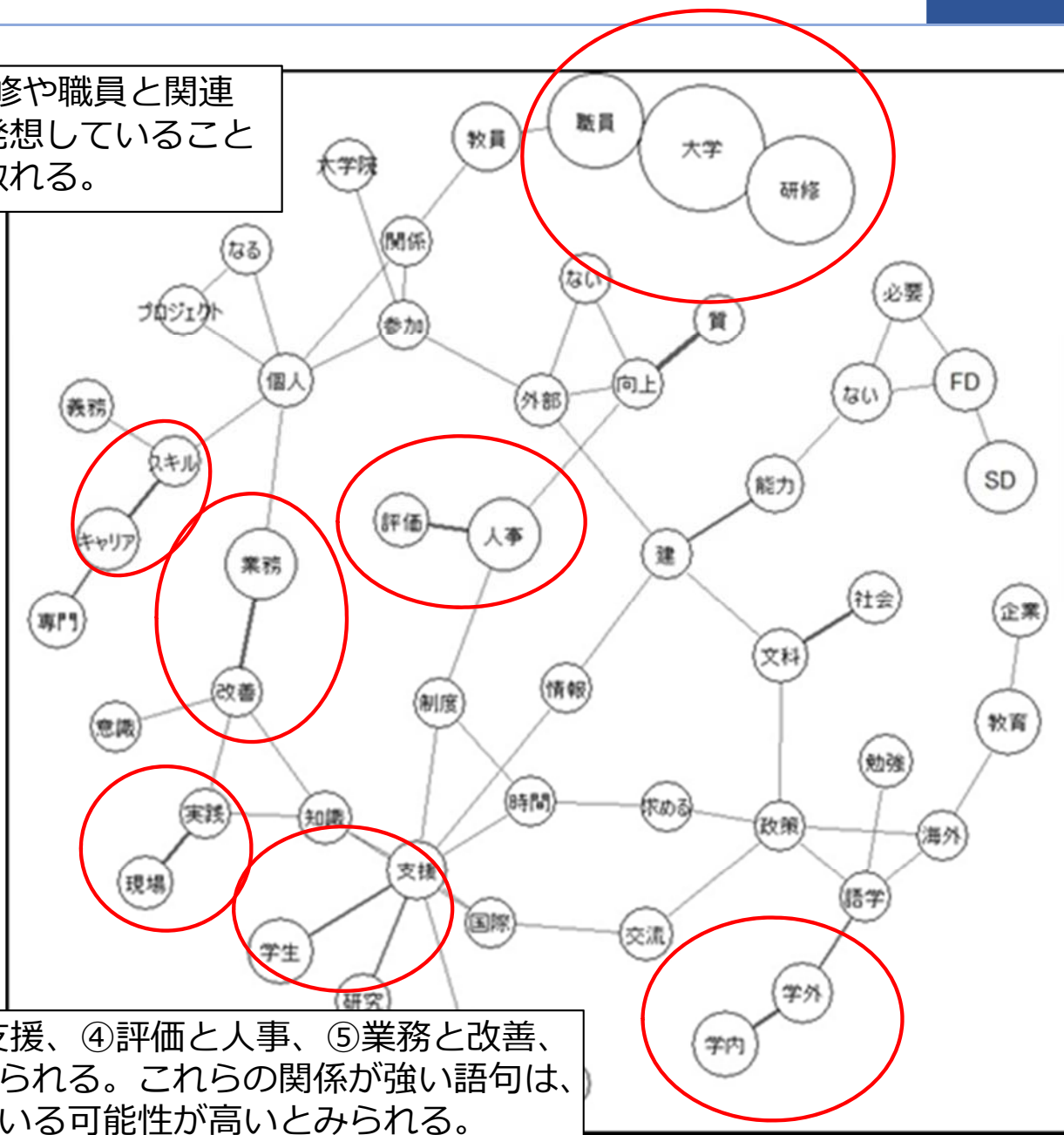
## コンセプトマップの例



# 結果① (コンセプトマップ)

| 名詞     | 数  | 言葉 | 数  | 形容動詞  | 数  |
|--------|----|----|----|-------|----|
| 大学     | 33 | 研修 | 26 | 必要    | 7  |
| 職員     | 21 | 教育 | 9  | 副詞可能  |    |
| 人事     | 12 | 支援 | 7  | 時間    | 3  |
| 業務     | 11 | 研究 | 5  | 未知語   |    |
| 教員     | 10 | 組織 | 5  | SD    | 11 |
| 学生     | 9  | 評価 | 5  | FD    | 8  |
| 学内     | 9  | 交流 | 4  | 動詞    |    |
| キャリア   | 8  | 勉強 | 4  | 求める   | 3  |
| 学外     | 7  | 意識 | 3  | 動詞B   |    |
| 専門     | 6  | 改善 | 3  | する    | 6  |
| 能力     | 6  | 管理 | 3  | ある    | 3  |
| 企業     | 5  | 関係 | 3  | なる    | 3  |
| 現場     | 5  | 向上 | 3  | 形容詞B  |    |
| 個人     | 5  | 参加 | 3  | ない    | 3  |
| 団体     | 5  | 仕事 | 3  | 名詞C   |    |
| 文科     | 5  | 実践 | 3  | 形     | 3  |
| 外部     | 4  | 対応 | 3  | 建     | 3  |
| 義務     | 4  |    |    | 質     | 3  |
| 社会     | 4  |    |    | 否定助動詞 |    |
| 大学院    | 4  |    |    | ない    | 7  |
| 知識     | 4  |    |    |       |    |
| スキル    | 3  |    |    |       |    |
| プロジェクト | 3  |    |    |       |    |
| 海外     | 3  |    |    |       |    |
| 感覚     | 3  |    |    |       |    |
| 語学     | 3  |    |    |       |    |
| 国際     | 3  |    |    |       |    |
| 情報     | 3  |    |    |       |    |
| 職能     | 3  |    |    |       |    |

SDは研修や職員と関連付けて発想していることが読み取れる。



①研修・大学・職員、②学内と学外、③学生と支援、④評価と人事、⑤業務と改善、⑥現場と実践、⑦キャリアとスキルの7点が挙げられる。これらの関係が強い語句は、コンセプトマップの1つの関係性の中で出現している可能性が高いとみられる。

# 結果②（第1回GW結果分析）

## 第( )班

### 「義務化前後のSD計画を策定して下さい」

- ・グループで出たSD計画を本紙又はホワイトボード等にまとめて発表して下さい。

## 結果②（第1回GW結果分析）

5班分のGW結果を本研究者3名でKJ法を用いて分析を行った。

- ①SD義務化に関わる**当事者意識の醸成**の必要性。
- ②**大学としてのSD方針**を打ち出す必要性。
- ③SDに**自校教育**を取り入れる重要性。
- ④SDと**人事制度との関係性**を検討する必要性。
- ⑤SDの**そもそもの必要性**の検討。
- ⑥SD義務化と**職員のモチベーション**の課題。
- ⑦SDの**カリキュラム化**の必要性。
- ⑧**継続的**なSDの実施・推進方法を検討する必要性。
- ⑨SDの**認知方法**を検討する必要性。

## 結果③（第2回KWL分析）

SDに係る現状を把握するために、参加者23名中回収できた19名分の「KNOW：事前知識」に記載された内容について本研究者3名でKJ法を用いて分析を行った。

| KNOW<br>事前知識             | WANT<br>ACCで何を得たいか       | LEARN<br>ACCで何を学んだか |
|--------------------------|--------------------------|---------------------|
| 1. 自大学のSDの現状について記載する     | SDについて、ACCを通して得たいことを記載する | ワールド・カフェ終了後に記載      |
| 2. SDに関わるところで、自分の現状を記載する |                          | 途中の気づきも記載           |

# 結果③（第2回KWL分析）

## 1. 研修としてのSD

- ①全学的な集合研修の実施（年1回）。
- ②中間（支援）組織等が開催する外部研修への参加。
- ③定期的な研修の実施（採用時・階層別・管理職研修）。
- ④年度ごとの研修の実施（課題・テーマ別の研修）。

## 2. 広義のSD

- ① = FD研修への参加。 ② = OJT。
- ③ = SD企画委員・研修講師・ファシリテーター活動。
- ④ = 研修報告会。 ⑤ = 自己啓発（英会話・大学院）。

## 3. 認知されないSD

- ①SDが職員間の共通言語になっていない。
- ②SD委員会・SD予算がない。
- ③経営層・管理職がSDの必要性を感じていない。



# 結果④（第2回GW結果分析）

## 第( )班

SDを通じて「何を実現したいか」そのためには「何が必要か」

・グループワークの問いと答えを本紙又はホワイトボード等にまとめて発表して下さい。

Q1:SDを通じて「何を実現したいか」を以下に記載してください。

Q2:実現するために「何が必要か」以下に記載してください。

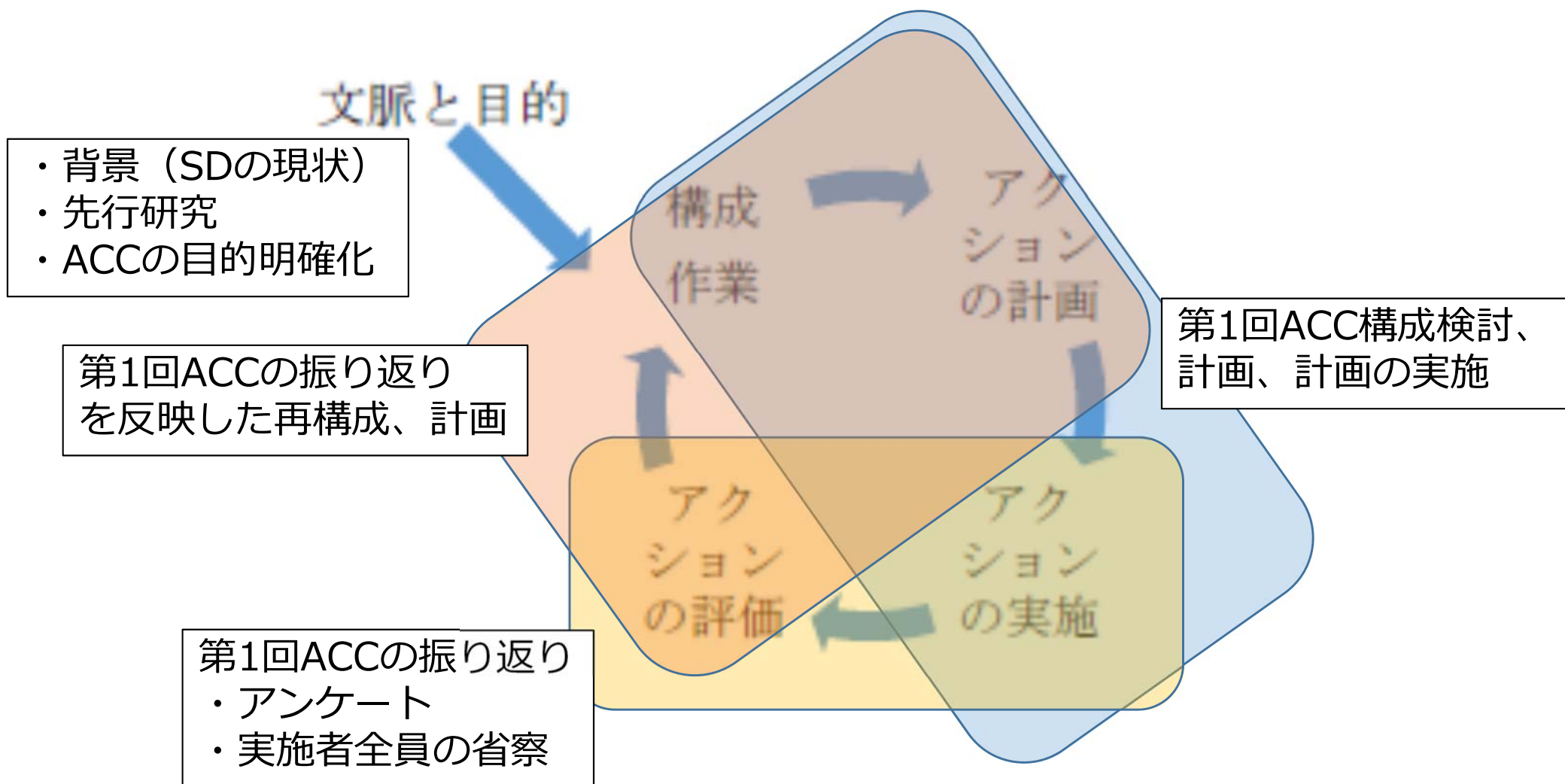
A:上記Q1、2で設定した各班の問いについて解決策を記載してください。

# 結果④（第2回GW結果まとめ）

5班中4班分のGW結果を以下の通りにまとめることができた。

- SDを通じて「①何を実現したいか」、  
そして実現するためには「②何が必要か」
- (1) ①職職協働を通じた大学のミッションの実現  
②各大学で求められる職員像の明確化
- (2) ①就職人気ランキング上位へランクイン  
②自信を持って自分の仕事を説明できる職員の育成
- (3) ①教員と渡り合える存在意識・能力の育成  
②業務の可視化、職能開発  
(インフラ整備、コミュニケーションの場作り)
- (4) ①仕事を楽しみながら大学のミッション達成に貢献するための場づくり・マインドの獲得  
②愛校心、モチベーション、あらゆる協働、専門性

# アクション・リサーチ・サイクル



Coghlan and Brannick (2010:8) を元に佐藤 (2015:94) が作成した「図14 アクション・リサーチ・サイクル」を引用し、本研究代表者 (上畠) が加筆した。

# アクションの評価

## 第1の改善点

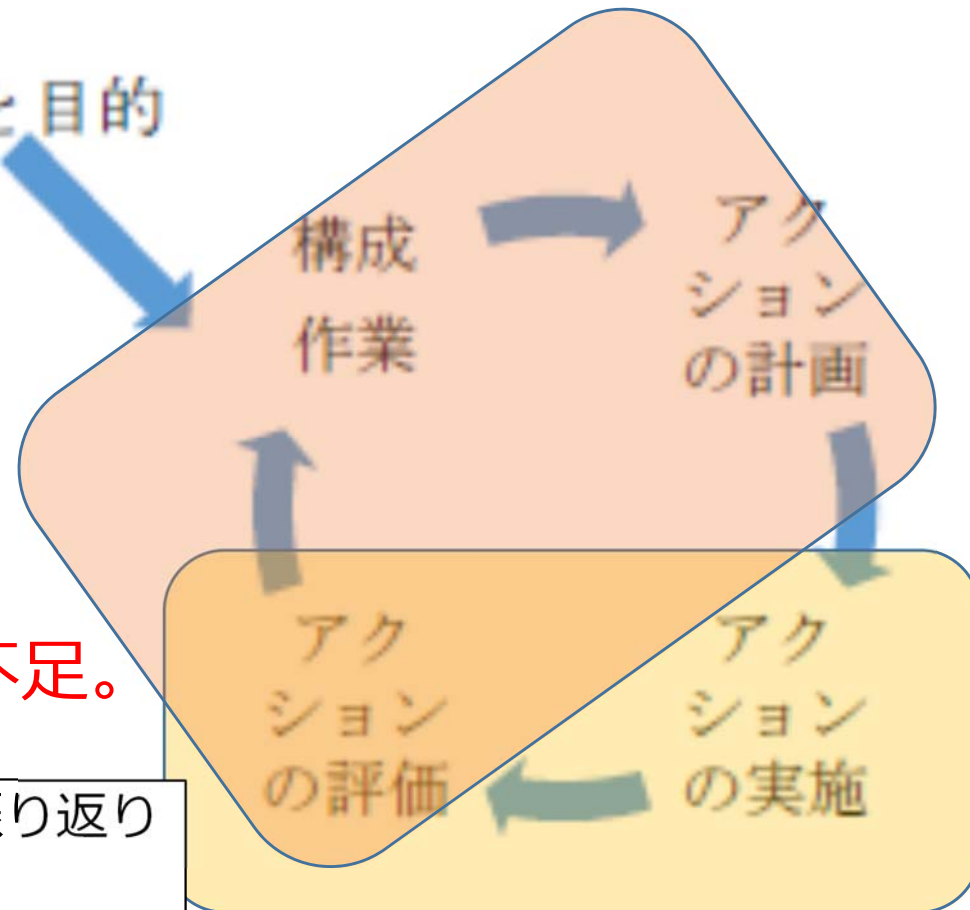
グループワーク内容や  
問いの設定の改善必要性。

## 第2の改善点

参加者に対する主体性や  
当事者意識を促す声かけの不足。

第1回ACCの振り返り  
・アンケート  
・実施者全員の省察

文脈と目的



Coghlan and Brannick (2010:8) を元に佐藤 (2015:94) が作成した「図14 アクション・リサーチ・サイクル」を引用し、本研究代表者 (上畠) が加筆した。

# 第1回ACCからの変更点

## ■ 第1回ACCプログラム

- 13:00-13:10 趣旨説明
- 13:10-13:30 イントロダクション
- 13:30-13:45 質疑応答・休憩
- 13:45-13:50 ワークショップ概要説明
- 13:50-14:00 個人ワーク  
(コンセプトマップ)
- 14:00-14:15 シンク・ペア・シェア
- 14:15-15:45 グループワーク
- 15:45-16:00 休憩 (名刺・情報交換等)
- 16:00-16:30 グループ発表
- 16:30-17:00 総括・アンケート

## ■ 第2回ACCプログラム

- 13:00-13:10 趣旨説明
- 13:10-13:30 イントロダクション
- 13:30-13:45 質疑応答・休憩
- 13:45-14:00 ワークショップ概要説明
- 14:00-14:15 個人ワーク (KWL)
- 14:15-16:00 ワールド・カフェ
  - ① ラウンド1 グループワーク 30分
  - ② ラウンド2 トラベリング 30分
  - ③ ラウンド3 グループワーク 45分
- 16:00-16:30 ハーベスト  
(共有とふりかえり)
- 16:30-17:00 総括・アンケート

# 第1回ACCからの変更点

## ■第1の改善点

グループワーク内容や問いの設定の改善必要性。

- ・参加者の予備知識、ニーズの把握、学習成果の可視化。  
→コンセプトマップからKWLへの変更。
- ・固定グループでのワークからワールド・カフェに変更。
- ・グループワークの問いの自己設定化。

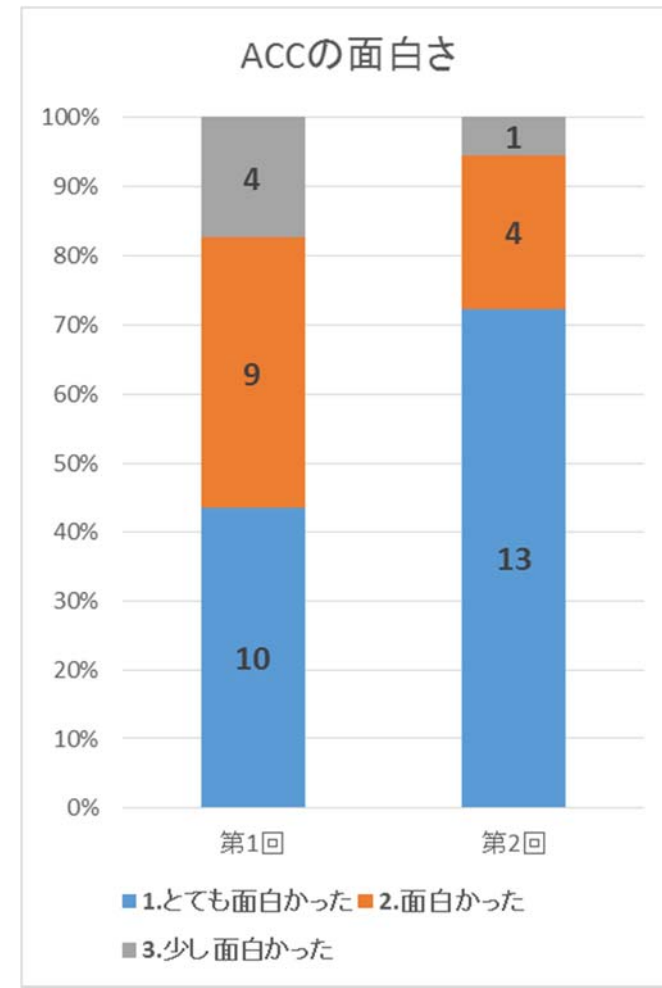
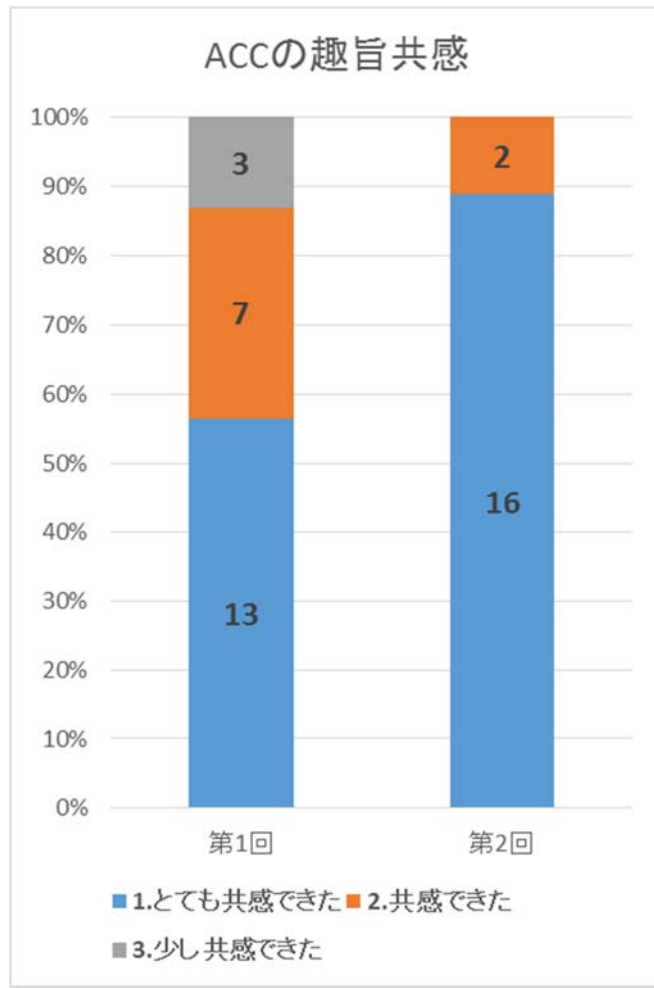
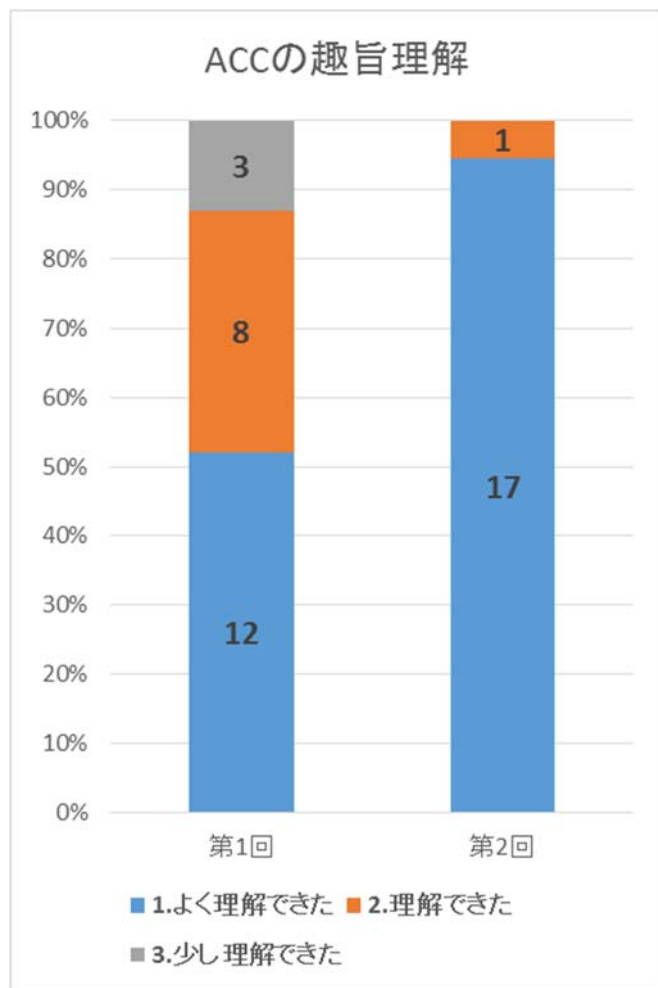
## ■第2の改善点

参加者に対する主体性や当事者意識を促す声かけの不足。

- ・ファシリテーターのグループワークへの関与度をアップ。
- ・ハーベスト（共有とふりかえり）にメッセージ性を高めた。

# 結果⑤ (アンケート比較分析)

■ 全ての質問項目において第2回の方が評価が上昇している。



# 結果⑤ (アンケート比較分析)

■ 全ての質問項目において第2回の方が評価が上昇している。

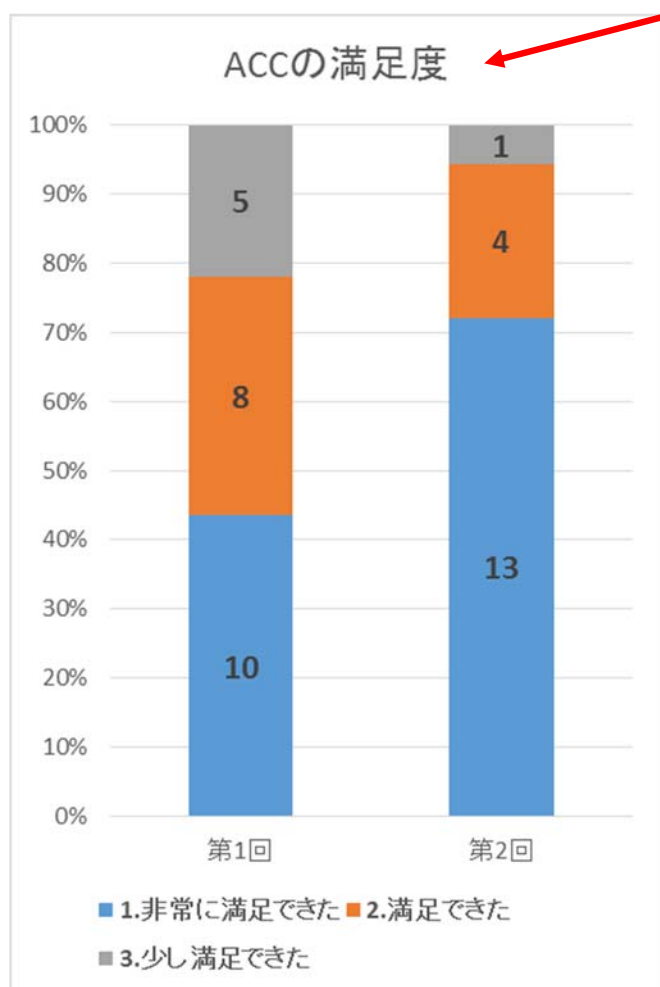
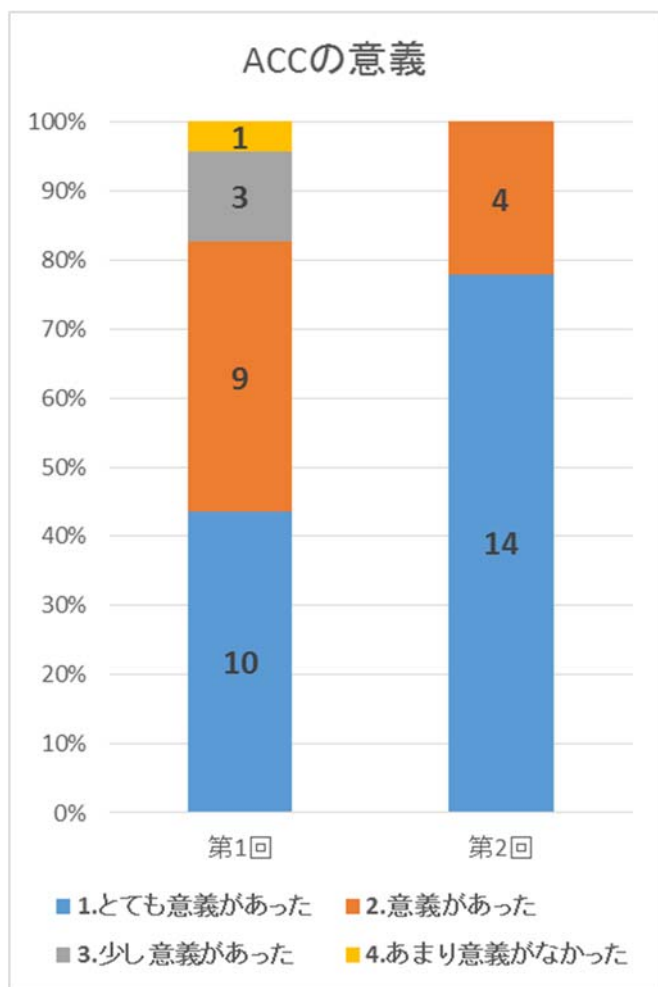


表1 カークパトリックの4段階評価

|      | 4段階評価論 | ACCへの応用       |
|------|--------|---------------|
| レベル1 | 反応     | 参加者の直接的満足度    |
| レベル2 | 学習     | 参加者の意識・知識変容   |
| レベル3 | 行動     | 参加者の参加後の行動の変化 |
| レベル4 | 成果     | 参加者の変化による効果   |

ACCはレベル1、2ともに満たしている。

SDに対する認識変容

|   | 第1回 |       | 第2回 |       | 計  |       |
|---|-----|-------|-----|-------|----|-------|
| 1 | 4   | 18.2% | 3   | 17.6% | 7  | 17.9% |
| 2 | 6   | 27.3% | 10  | 58.8% | 16 | 41.0% |
| 3 | 9   | 40.9% | 3   | 17.6% | 12 | 30.8% |
| 4 | 2   | 9.1%  | 1   | 5.9%  | 3  | 7.7%  |
| 5 | 1   | 4.5%  | 0   | 0.0%  | 1  | 2.6%  |

※SDに対する認識変容の設問は以下の通り。  
以前から変わった 1・2・3・4・5 全く変化していない  
1寄りなほど認識変容度が高く、5寄りなほど低い。



# 結果⑥（効果・影響分析）

表1 カークパトリックの4段階評価（再掲）

|      | 4段階評価論 | ACCへの応用           |
|------|--------|-------------------|
| レベル1 | 反応     | 参加者の直接的満足度        |
| レベル2 | 学習     | 参加者のSDに関する意識・知識変容 |
| レベル3 | 行動     | 参加者の参加後の行動の変化     |
| レベル4 | 成果     | 参加者の変化による効果       |

（レベル3：行動）

- ・ 第1回ACC参加者が自大学主催のSDイベントに本研究者を講師として招聘。
- ・ 第2回ACC参加者が中間支援組織のSDイベントに本研究者を講師として推薦。

（レベル4：効果）

- ・ ACC実践効果が参加者に認められ上記2つのSDイベント講演・WS実施に波及した。

（その他の影響）

- ・ 文部科学教育通信 No.387 p.42 「大学寮」に第1回ACCの記事掲載。
- ・ 大学マネジメント研究会主催のSDイベントに本研究者が講師招聘。

# 考察①

## 1. ACC参加者のなまの声を通したSDの現状と課題

### ■ SDの現状と課題

SDは職員**研修**に強く関連付けられている。

SDが**大学のミッション**と紐付けられていない。

SDに密接に関連する**人事制度**の現状の不備や、

今後起こりうる課題の検討がなされていない。

各大学でSDの**共通認識**がない。

**自大学の現状**を踏まえて十分に検討されていない。

SDに係る計画を策定することは非常に**困難**である。

特に**経営層**を対象にしたSDの検討と実施が必要。

SDを検討する**場**やコミュニケーションの**機会**が必要。

## 考察②

### 2. ACC実施の効果や影響

- (1) カークパトリックの4段階評価を用いてレベル1からレベル4全ての評価項目に該当する効果や影響を確認することができた。
- (2) 第1回ACCの「アクションの評価」を通して、第2回ACCの企画・内容の改善を行い、その改善効果が確認できた。

# 今後の課題

計2回のACC実践結果についてのアクション・リサーチ・サイクルにおける「アクションの評価」の実施と、これを踏まえ「当事者兼研究者」としての思考・実践態度の獲得に向けた第3回ACC実施等の検討が必要である。

大場（2014）と羽田（2013）が指摘する、SDを研究対象のひとつとする大学職員論の課題である「研究手法の開発」と「実務と研究との間の乖離」に関し、アクション・リサーチが妥当な研究手法であるのか精査する必要がある。

本研究では、佐藤（2015）のFD研究手法を援用したに過ぎず、今後SD研究に適したアクション・リサーチの精緻化又は新たな研究手法の検討と開発が必要である。

# 参考文献

- 岩崎保道 (2014) : 大学におけるSD(Staff Development)の現状－アンケート調査分析を中心として－、高知大学教育研究論集、18、pp27-34
- 大場淳 (2014) : 大学職員研究の動向－大学職員論を中心として－、大学論集、46、pp91-106
- Coghlan, David and Brannick, Teresa (2010) Doing Action Research in Your Own Organization, 3rd edition, London, SAGE Publications Ltd.
- 佐伯胖監・渡部信一編 (2010) : 『学び』の認知科学事典』、大修館書店
- 佐藤浩章 (2015) : ファカルティ・ディベロップメントの構造と評価に関する研究、博士(教育学)学位申請論文(北海道大学)
- シュワント・A, トマス (2009) : 質的研究用語事典、北大路書房
- 神保啓子 (2009) : コミュニティ・オブ・プラクティスによる教職協働、大場淳編『大学職員の開発－専門職化をめぐる－』、高等教育研究叢書 105、pp47-57
- 武田信子・金井香里・横須賀聡子編著 (2016) : 『教員のためのリフレクション・ワークブック 往還する理論と実践』、学事出版
- 寺崎昌男 (2010) : 大学職員の能力開発 (SD) への試論 : プログラム化・カリキュラム編成の前提のために、高等教育研究、13、pp7-21
- 私学高等教育研究所 (2010) : 財務、職員調査から見た私大経営改革、私学高等教育研究叢書
- 羽田貴史 (2013) : 大学職員論の課題、大学職員論叢、1、pp45-59
- パーカー, イアン (2008)、ハツ塚一郎訳 : 『ラディカル質的心理学－アクションリサーチ入門－』、ナカニシヤ出版
- 福島一政 (2010) : 大学のユニバーサル化とSD－大学職員の視点から－、高等教育研究、13、pp7-21
- 孫福弘 (2003) : 第4章 SD (大学職員開発) の概念と意義 : もうひとつの「SD」へ、大学職員研究序論、高等教育研究叢書、74、pp.38-48
- 山本淳司 (2010) : 現場から見た職員の能力開発と「大学職員論」再考－実践的SD論への道標－、京都大学高等教育研究、16、pp.83-90
- 山田剛史 (2010) : 大学教育センターからみたFD組織化の動向と課題、国立教育政策研究所紀要、139、pp21-35
- 矢守克也 (2010) : 『アクションリサーチ 実践する人間科学』、新曜社

ご清聴ありがとうございました。

以下第1、2回ACCCの  
グループワークに関する  
参考資料を添付します。

# 第1回 ACC 「アカデミック・カフェ・キャラバン」 ワークショップについて

国立大学法人金沢大学  
国際基幹教育院 高等教育開発・支援系  
上畠 洋佑(うえはた・ようすけ)  
yousukeu@staff.kanazawa-u.ac.jp



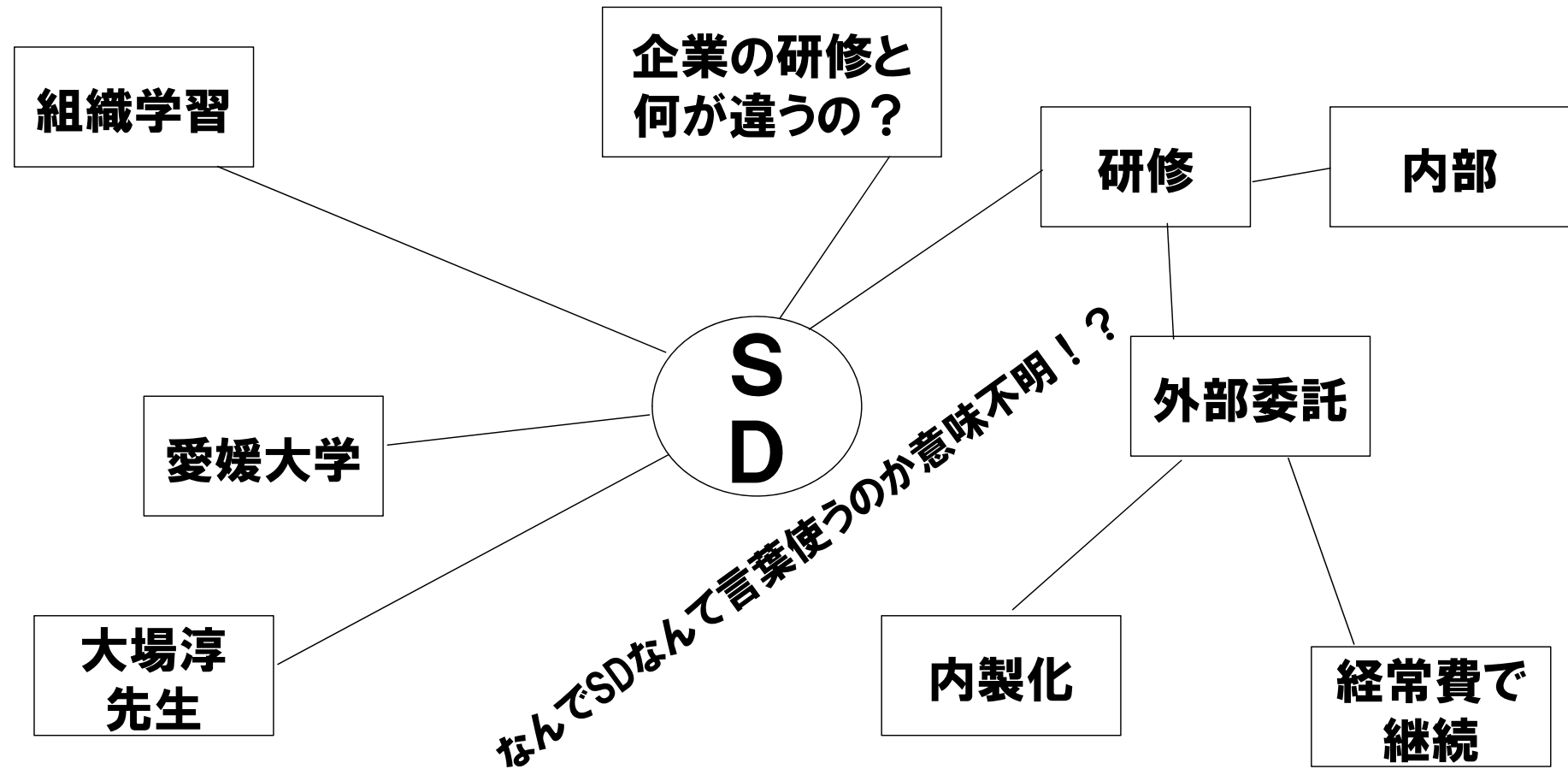
# グランドルール

- 1. 自分の意見や立場に固執しない。**
- 2. ゆったりと話し合う。**
- 3. 相手の発言に耳を傾け、  
その背景について探求する。**
- 4. 1人のつぶやき、ふと思ったこと、偶然に  
起こる現象を大切にして、全員で波紋の  
ように広げる。**

# ワークショップの流れ

1. 13:50-14:00 個人ワーク  
(コンセプトマップ「SD」)
2. 14:00-14:15 シンク・ペア・シェア  
(コンセプトマップをペアでシェアし議論)
3. 14:15-15:45 グループワーク  
(3つのペアを1グループに統合し議論)
4. 16:00-16:30 グループ発表  
(5グループ×6分)

# コンセプトマップの例



個人ワークの時は黒で書いて、ペアの時は赤など色を変えて書き足したりしてください。  
他者との対話によりSDの概念が変化したことを後で振り返ることが可能になります。

# ワークショップ(グループワーク)

## 第( )班

### 「義務化前後のSD計画を策定して下さい」

- ・グループで出たSD計画を本紙又はホワイトボード等にまとめて発表して下さい。

※本紙(本紙を使わない場合は当該発表を記載したものを撮影した写真を含む)は終了後回収し、後日ウェブ上で参加者が共有できるようにいたします。  
また本紙を含めた各判の発表は学会発表等で使用いたします。学会等で公表する場合において個人情報保護され回答者が特定されることはありません。

# 第2回 ACC

## 「アカデミック・カフェ・キャラバン」

### ワークショップについて

国立大学法人金沢大学  
国際基幹教育院 高等教育開発・支援系  
上畠 洋佑(うえはた・ようすけ)  
yousukeu@staff.kanazawa-u.ac.jp

# ACCの目的

## ■ACCを通じた「SDer」への変容

### 1. クリティカル・シンキング

総合判断的な批判的思考の獲得

批判 ≠ 人格の批判 建設的な思考力

### 2. 自己省察力

省察的実践家としてSDer

# グループワークのコンセプト

## 主催者(喜久里・上島)の期待

### ■ACC開催者から参加者への期待

- ・SD義務化を迎える各大学の現状を教えてください
- ・各大学の文脈に応じてどのようなSDの多様性が生まれるか教えてください

### ■参加者に何を持ち帰ってほしいか

#### クリティカル・シンキング

- －自大学SDの現状への批判的考察
- －総合改革支援事業への批判的考察

#### 自己省察力

- －KWLのワークで変容を感じ自己省察
- －グループワークでの対話で自己省察

グループワーク(Q)で  
各グループでの問いの形成

各グループ  
で検討

「問い」のテンプレート  
SDを通じて  
「何を実現したいか」  
そのためには  
「何が必要か」を議論

トラベリング(他花受粉、  
異者との出会い・対話)

各グループで設定  
したQにAを出す

# グランドルール

1. 自分の意見や立場に固執しない。
2. ゆったりと話し合う。
3. 相手の発言に耳を傾け、  
その背景について探求する。
4. 1人のつぶやき、ふと思ったこと、偶然に  
起こる現象を大切にして、全員で波紋の  
ように広げる。
5. 発言する際はトーキングオブジェクトを持つ。



# ワークショップの流れ

1. 14:00-14:15 個人ワーク KWL
2. 14:15-16:00 ワールド・カフェ
  - ① ラウンド1 グループワーク(Q) 30分
  - ② ラウンド2 トラベリング 30分
  - ③ ラウンド3 グループワーク(A) 45分
3. 16:00-16:30 ハーベスト(共有とふりかえり)  
(5グループ×6分)

# KWLについて

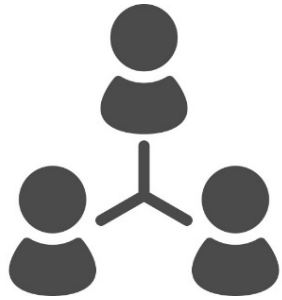
1. 予めKWLを作成した方はグループ内で共有する
2. 未作成の方は時間内に作成する

| <b>K<sub>NOW</sub></b><br>事前知識 | <b>W<sub>ANT</sub></b><br>ACCで何を得たいか | <b>L<sub>EARN</sub></b><br>ACCで何を学んだか |
|--------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 自大学のSDの現状<br>について記載する       | SDについて、<br>ACCを通して<br>得たいことを記載する     | ワールド・カフェ<br>終了後に記載                    |
| 2. SDに関わるところで、<br>自分の現状を記載する   |                                      | 途中の気づきも記載                             |

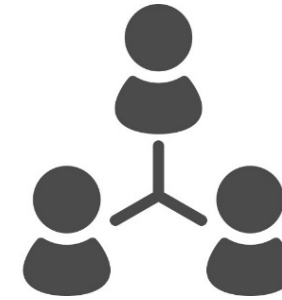
※記載頂いたKWLは終了後回収し、後日ウェブ上で参加者が共有できるようにいたします。  
また本紙を含めた各判の発表は学会発表等で使用いたします。学会等で公表する場合において個人情報は保護され回答者が特定されることはありません。

# ワールド・カフェの流れ

SDを通じて「何を実現したいか」  
そのためには「何が必要か」を議論

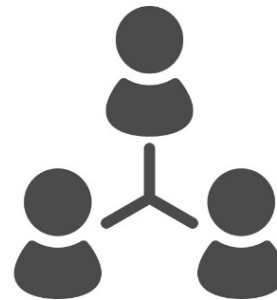


SDを通じて「何を実現したいか」  
そのためには「何が必要か」を議論



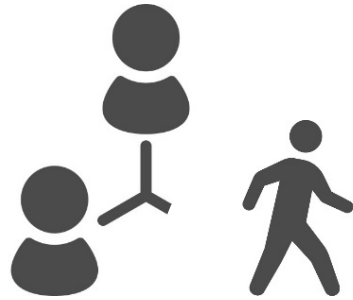
5つのグループに分かれてQを作成 30分

SDを通じて「何を実現したいか」  
そのためには「何が必要か」を議論

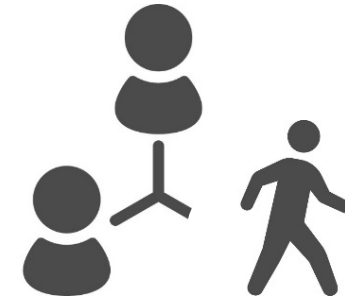


# ワールド・カフェの流れ

「何を実現したいか」の問いに対する  
課題と解決策を議論

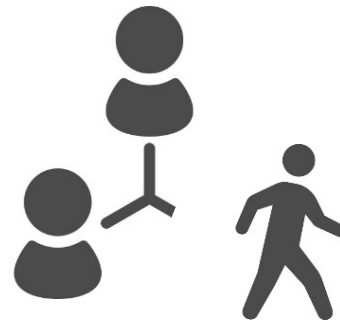


「何を実現したいか」の問いに対する  
課題と解決策を議論



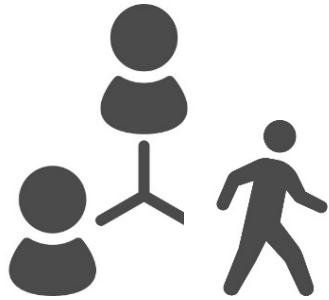
各グループ1名残して移動しQについて議論 30分

「何を実現したいか」の問いに対する  
課題と解決策を議論

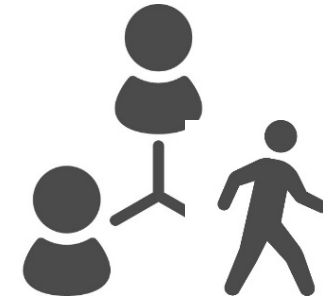


# ワールド・カフェの流れ

「何を実現したいか」の再設定  
(見直しが必要であれば見直す)と、  
必要なものと解決策のとりまとめ

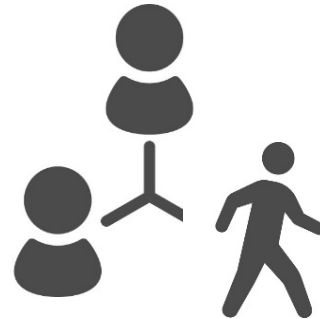


「何を実現したいか」の再設定  
(見直しが必要であれば見直す)と、  
必要なものと解決策のとりまとめ



**元に戻り、再度Qを議論しAを出す 45分**

「何を実現したいか」の再設定  
(見直しが必要であれば見直す)と、  
必要なものと解決策のとりまとめ



# ワークショップ(グループワーク)

## 第( )班

SDを通じて「何を実現したいか」そのためには「何が必要か」

・グループワークの問いと答えを本紙又はホワイトボード等にまとめて発表して下さい。

Q1:SDを通じて「何を実現したいか」を以下に記載してください。

Q2:実現するために「何が必要か」以下に記載してください。

A:上記Q1、2で設定した各班の問いについて解決策を記載してください。

※本紙(本紙を使わない場合は当該発表を記載したものを撮影した写真を含む)は終了後回収し、後日ウェブ上で参加者が共有できるようにいたします。  
また本紙を含めた各判の発表は学会発表等で使用いたします。学会等で公表する場合において個人情報保護は保護され回答者が特定されることはありません。